

舟橋聖一

現代日本文学館

34

小林秀雄 編集

文藝春秋

現代日本文学館 34

舟橋聖一

昭和四十二年六月一日第一刷

著者 舟橋聖一

発行者 上林吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)一二一一
振替東京七八七四三

印刷 凸版印刷

製本 凸版製本

定価 四八〇円

目次

舟橋聖一伝 佐伯彰一 3

花の生涯 27

篠笛 428

相撲記抄 439

注解 450

解説 471

年譜 478

挿画 中村貞以

舟橋聖一伝

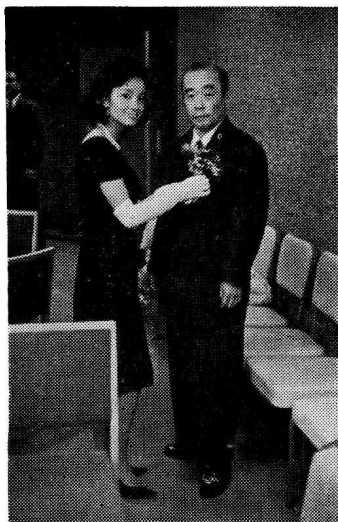
佐伯彰一

舟橋聖一氏の作家的な誕生、また生長を跡づけようとして色々と思ひめぐらしているうち、おのずと浮かんできた特徴の一つは、永井荷風の場合とのいちじるしい類縁である。これは両氏の作風における類似、ともに執拗ともいいたいほどに一貫してエロスの作家たりつづけたという点からの逆の類推ではない。むしろ両者の幼少年期、その家庭環境などを同時に辿り調べているうちに、おのずと目につかざるを得なくなった類似なのである。

一八七九年生まれの荷風と、一九〇四年生まれの舟橋氏との間には、二十五年の年齢差がある。つまり、近頃の安っぽい濫用ではない、本来の意味で、まるごと一世代の違いが存するが、この明確な世代の相違はかえって両者のさまざまな類似をくつきりと浮かばせ引き立たせてくれるかのようだ。両者はまず東京に生まれ、育った都会児であり、ともに優秀かつ謹直な官僚、また官学教授の長男であった。荷風の父、永井久一郎は、明治五年という早い時期に選ばれてアメリカに派遣された官費留学生であり、帰国後は、工部省、文部省などを歴任し、その間にわが国最初の国立図書館の創設を企画立案したり、啓蒙的な翻訳書を出したりした。その後、実業界に転じたが、明治の草創期における実務型の知識人としては、能力、業績ともに俊秀なひとりといつてよい。舟橋氏の父、了助氏は、長男の出生当時は、東京大学工科の助教授を勤めていた。《老父は、仙台

の産だ。旧制高校（七年制）の二高から、東大の工学部へ入った。父の父は伊達藩の藩儒で、養賢堂の教師を勤め三百石を貰っていた。御一新で、それもなくなると、無職の宮城県士族となり、三百石の代りに、道場小路に約七百坪の地所と家を拝領したが、やがて、それは東北大に買い上げられ、応用化学教室の敷地になってしまった。その後、遣水丁に家を求めたが、売るものはことごとく売りつくして、ついには貧窮のどん底に落ちた。老父はその四男坊であつたから、旧制高校へ入るにも自分で学資をかせがねばならなかつた。貧しい儒者の息子のアルバイト学生だつた了助氏は、大学では「畑違いの採鉱冶金学」を専攻したが、すこぶる勤勉かつ優秀な学生で、恩賜の銀時計を得て卒業すると、すぐ工学部の助教授となつた。そして、長男の舟橋氏が五歳の明治四十二年には、文部省から欧米諸国視察を命ぜられ、おもにドイツ・プロイセンの鉱山大学で研究をつむこと三年、帰朝すると同時に、学位を得て、教授に昇進した。《やがて主任教授、勅任教授とへ、あがつた。位階や勲等も昇進して、大礼服を著用し、頭には大礼帽を乗せて、宮中へ参内したり、まだご丈夫だったころの大正天皇に、御前講演をしたり、夫婦で観桜の御宴などに出かけてゆくのは、珍らしくなかつた。》と、舟橋氏は近作の自伝風な中篇「風中燭」で書いている。

まず成功、榮進した官学教授の典型的な経歴であり、生活ぶりであつた。その長男として生まれた舟橋氏が、工学部にも入らねば、学者への道も進まないで、小説家になつ



昭和38年 59歳の誕生パーティにて 左は松竹女優真理明美

た。そうした将来の職業の選択について、この父と子との間には、さして劇的な対立は生じなかったようであるが、一種の「息子の反乱」であり、父への反撥には違ひなかっただろう。この点でも、荷風の場合と相通する所がみとめられる。荷風は旧制一高の入試に落第して、父から激しく叱責されながら、父が日本郵船の支店長として上海に赴任して、留守にした間に、早くも「北里に遊ぶ」味を覚えたり、小説家を志して広津柳浪の門に弟子入りしたりした。また「実用の学」を身につけるようにとの父の配慮による、アメリカ留学、フランスの銀行勤務も、かえって荷風の芸術家への決意を固めさせたにすぎなかった。ある意味では、荷風の作家的な出発は、父からの離脱、父的なものへの反抗として始まった。舟橋氏の場合には、これほどの際立った対立や衝突はもちろん生じなかったが、父もしくは父的

なものへの反撥や嫌悪は、氏の作品の所々で吐露されている。たとえば、今引いた「風中燭」には、《しかし私は、そういう父を偉い人とは、かつて一度も思ったことがなかった。また自分が将来、父のようになって、大礼服を着たいなどとは、ゆめにも思わなかった。》また《しかし、私はそういう父にはなずめなかった。父を英雄化したり、崇拜したり、父のようになろうとは思わなかった。第一、自分が父と同じ官学へ入れるかどうかもわからない。おそらく、父にとっては、軽蔑すべき無学の一生を送らなければならぬのではないのか。そう思うと、大礼服を着たり、シルクハットを冠ったりする意気揚々たる父を見るのが、実は苦痛でもあったのである。》

父からの疎隔、父への反撥は多くの場合、その向う側に、母、もしくは母的な世界への接近、親愛をよびこむことになりがちである。いや、父からの疎隔や反撥そのものが、すぐ裏側で、そうした対極的な牽引力によって支えられ、裏付けられている、といった方がいい。荷風の場合が、明らかにそうであり、舟橋氏についても、ほぼ同じことが当てはまる。しかも、両者とも共通なことは、父から息子を引き離れた牽引力あるいは疎隔力の源を、直接に母そのものというより、母の実家、なにかんづく祖母の存在に負うていた、という点である。荷風は、みずから「三文甘い祖母さん子」だ、という。弟が生まれた時には、一年近くも母方の祖母の家にあずけられたこともあった。人力車に揺られて、この「下谷の家」へ運ばれた幼年期の、夢と現との

境のような「神秘で詩的」な思い出を描いたほとんどブルースト風なエッセイが荷風にはある。「下谷の家」自分を可愛がってくれた祖母の死を情緒的なクライマックスとする、一種の鎮魂歌であると同時に、「気高くまた物寂しい」、封建時代という過去がそのままに息づいていたような雰囲気、再現をも果たし得て、後年の荷風の想像力にとっての一つの源泉のありかを、はっきりと教えてくれる。いわば現世的、現在の成功者たる父の支配する「小石川の家」とは、まったく別種の世界であり、この家が、震災で焼失した時、荷風は改めてこの家の思い出のために、鵬外風な史伝の試み「下谷叢話」を捧げることになった。ブルースト風にいえば、「下谷の家」は、荷風にとっての「ゲルマント家の方」であった——ただし震災によって焼滅させられて、もはや幻滅に導く恐れのまったくないところの。

さて、舟橋氏の場合にも、同じような「下谷の家」の存在がみとめられるのだ。もっとも場所は、下谷ではなく、両国の番場町であり、後には中目黒に移ったのだが、母方の実家近藤家が、幼年期の舟橋氏にとって果たした役割は、荷風におけるより、一層生ま生ましく直接的だった、といえるかも知れない。とくに母方の祖母広子氏の影響力は、明らかに荷風の場合を上廻っていた。いや、少なくとも、荷風にとっての「下谷の家」の祖母が、「気高く物寂しい」別世界の体現者として、何よりもその象徴的な価値が重要だったのに対して、舟橋氏の場合は、もっと現世的、現実

的な贅沢と感覚的な快楽にじかにつながっていた、ということが出来る。

近藤家の番場町の家は、敷地が六百坪、建坪が二百坪という宏壮な邸宅で、舟橋氏によると、「表門から玄関まで、砂利をしきつめた広場があり、二頭立の馬車が、ぐるっと廻れるようになっていた。玄関を上がると、左手にイギリス風の広い洋室が二間あって、贅沢な調度と、厚いじゅうたんが敷いてあった。右手は、一間幅の廊下がまっすぐに通っていて、日本間が八間。洋風の食堂が一間、二階建の土蔵が棟、ほかに、祖父たちの寝室として、二階座敷が二間つづきになっていた。庭は泉水造りで、大きな池があり、白い御影の橋が、わたしてあった。別に中庭が三つあった。聖一少年にとって、何より印象的だったのは、母方の実家の、こうした富裕と贅沢であつたらしい。《子

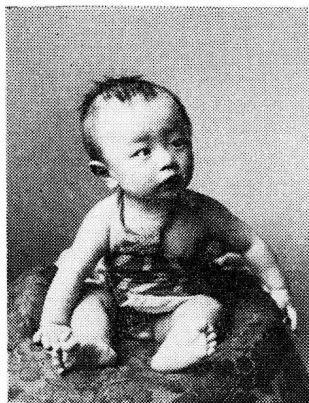


近藤隆三郎、広子夫妻 明治37年

供には思想の抵抗がないから、貧乏をきらって贅沢を愛するの自然である。私なども、五ツ六ツにして、すでに父の生家の貧乏たらしきを軽蔑し、母の実家の贅沢風に親しんだ。そこでは、芝居、芸人、芸者、関取などの未知が、私を惹きつけた。』と氏自身がみとめている。(『もて遊び草』)

舟橋氏の外祖父近藤陸三郎氏は、当時古河合名会社の理事長を勤めていた。明治の大ブルジョワの財政全般をあらゆる番頭役として、この程度の暮らしぶりは、当然だったろう。もともと工部大学校(東大の前身)出身の鉾山技師であったが、銅山王の古河市兵衛に認められて、古河鉾山の社員となり、やがてヨーロッパへ一年半にわたる視察旅行に派遣されている。いわゆる足尾銅山の鉾毒事件の折に、当の所長を勤めていたのが、この陸三郎氏である。

幼年時代の舟橋氏は、原敬とも「入魂の間柄」だったといふこの外祖父に、大いに可愛がられ、つよい親しみを感じていたらしい。後年



生後8カ月 最初の写真

事件の経緯をくわしく知り、当時陸三郎氏

の演じた役割が、見方によれば「悪玉中の悪玉」というべきものだったことを、気づかせられた時にも、この幼年期の気持は変わらなかったという。《しかし、私はこの半白頭の祖父が好きであった。みんなが、祖父を可怕がって、あまり傍へも行かないのが、ふしぎなくらいで、正直なところ、私には父より祖父のほうが、親しめたくらいである。と云って、威厳がなかったわけではない。父は白面の紳士だが、祖父は貫録十分で、原敬と並んでも遜色なかったが、私は孫だから、平気で祖父に甘え、すぐ祖父の膝に乗り、腰越の別荘で原敬との秘密の対談中も、私だけは、人払いの中にはいらなかった。』この近藤家の別荘では、聖一少年は古河家の二代目の当主やその夫人と接触する機会も多く、とくに夫人の美貌に強い印象を受けたようだ。こうした幼年期の思い出が、後年の舟橋氏をして、たとえば「とりかへばや秘文」(昭和四十一年)といった「ハイ・ソサイアティ小説」を書かしめる胚珠ともなっている。《彰太郎がはじめて水沢男爵夫妻のお供で、箱根木賀の別荘へ行ったのは、中学卒業前の年の夏だった。当時、男爵というものが、どんな社会的特別待遇を受けていたかは、現代の人には、ちょっと想像のつかないものがある。……男爵水沢一俊は、銅山王としてその名を謳われた水沢三俊の嫡男で、容貌風采まことに麗質。身長は五尺八寸。体重は十八貫二百匁あった。』という書き出しを読めば、そのつながりは明らかである。もちろん、これは回想風なモデル小説からは縁遠い、奔放なロマンス仕立ての作品だが、舟橋氏は、

(下) 満三歳
(左) 高千穂小学校のころ



自然にブルジョワの生活を描き得る感覚と経験をかね具えたわが国には数少ない小説家の一人なのである。

が、幼年時代の氏にとって重要なのは、やはりこの祖父より、祖母の影響であつた。《わたしは、子供のころ、祖母に可愛がられて育つた。祖母は、私の一族にとって、一番、重きをなしていた。……わたしは、子供心にも、その貧しげな父よりも、富有な祖母の方に、ひきつけられた事実、祖母の言は父の言よりも、重きをなしていて、あることないこと、父の悪口を告げれば、祖母は必ず、わたしの味方をし、頭ごなしに、父をやりこめてくれた。》(『童子』) ところで、父と祖母とが、すぐに対照的、対立的な両極として思い比べられているのは、舟橋氏独特の反応の型である。父と祖母とは、聖一少年にとって、いわば二つの世界の象徴ではなかつたらうか。父は、勤勉、几帳面で、貧乏たらしい、官学風な融通の利かなさを代表すれば、祖母はまさにその反対物——遊び好きで、贅沢、豪奢で、感

覚的なゆたかさの象徴であつた。たとえば、舟橋氏にとって、歌舞伎座や市村座の芝居見物の思い出は、祖母と別ちがたく結びついていた。祖母が、原敬夫人や古河男爵夫人を誘つて芝居に出かける時のお供は、きまつて聖一少年に限られていた。舟橋氏の作家的な出発は、まず劇作家としてであり、演劇への情熱こそ氏の文学的青春の中核をなすものといえるのだが、そうした種子のいち早い蒔き手は、やはりこの祖母であつた。

また、聖一少年が、芸者や半玉を身近に親しんだというのも、母方の実家、この祖母の家においてであつた。《母の実家では、自分の家で客をするのに、女中では間に合わず、いわゆるお屋敷行きという玉代を払つて、芸者を給仕に呼んだからである。その代り、祖母は芸者たちに対しては舐められたりしないような適宜な威信と愛嬌を兼ね備えなければならなかつた。大正以後の家庭の主婦には、そうした苦勞が要らないというので、後年祖母は、「このごろの奥様たちは、楽でいい。旦那様の機嫌さえ取つていればいいのだから……」と、よく云つたものだ。》と先に引いた「もて遊び草」にある。聖一少年は、こうした芸妓たちに取巻かれて「坊ちゃん、坊ちゃん」とチャホヤされたり、よく一所に隠れん坊などをして遊んだ、という。ある時、「一本になり立ての若い妓」と二人で納戸小屋に隠れて息をこらしているうち、急に抱きよせられて、白い頬つべたを押しつけられた。《それが何秒ほどつづいたろうか、妓

は急に私の首をはなしたかと思うと、「坊ちゃん……ごらん」と云って、衣裳の裾前をまくり、その下の緋縮緬の長襦袢やら蹴出しやらを、何枚もまくり、白い内モモを出し、さらにその奥の方まで、覗かせようとした。子供ながら私も少々、たじろぎ、「いやだいい」と云い放った。そのとき、私はほんとうにいやだったのだが、しかし女のまっしろな内モモの色は、世にも美しいものと目を惹かれた。

……薄暗い納戸の中で、突然見せられた女の内モモの白さは、いつまでも私の目を去らなかつた。おそらく、五十年の私の人生において、あれほど、なまなまとした妙な感覚は、最初で最後だったような気がする。こうした後年の回想、放恣なまでの感覚的開眼の思い出に、いく分の小説的潤色は加えられているにせよ、祖母の家の伸びやかな雰囲気としっかり合うイメージだった点は、疑いない。ついながら、舟橋氏の文壇的処女作は、「白い腕」という題の戯曲であり、また最近作の性的自伝の要素のつよい「眞贋の記」には、小学校の図画の時間に、ダリヤの花を取りかこんで写生している最中、主人公がすぐ前にいる少女の「洋服の背中のホックが二つほど外れていて、肉づきのいい背中の白い肉がのぞいているのを凝っと見つめ」という印象的な場面が出てくる。女の白い肉は、幼年時代以来、氏の感覚と想像力とをとらえて離さぬ原型的なイメージといえるのではないか。

この祖母は、幼い舟橋氏にとって、感覚的な陶醉の世界への導き手の役割を果たしてくれた。と言い切れば、誇張

にすぎるかも知れないが、少なくとも感覚的な享楽や開眼にかかわる幼少年時の体験は、そのほとんどが、祖母につながる思い出としてとらえられているのだ。作家の生長について考える場合、重要なのは事実いかんよりは、それに対する反応の仕方、とらえ方、つまりは彼の作り上げようとするイメージの質と方向の問題ではないだろうか。舟橋氏の場合、回想的な小説や自伝的な作品における中心のモチーフは、何よりも感覚と感受性における陶醉と開放の過程である。フロアベルの小説になぞらえていえば、感覚教育こそ、舟橋氏の一貫して変わらぬ主題である。しかも、そういう際、きまって呼びこまれる守護女神の名前が、この祖母、氏のいわゆる「僕の愛するグランド・ママ」なのである。

舟橋氏は、文学教育についても、並々ならぬものを祖母に負っている、という。ろくに本を読めないくらいの子どもの氏に、川上眉山や尾崎紅葉の小説を読みかかせてくれ



水戸高校時代(左)

た。この祖母は、お気に入りの新聞小説を朗読させるのが好きだったが、その際いつも聖一少年もそばに呼ばれた由である。こうい

う挿話は、たとえば円地文子の少女時代における文学開眼の過程を連想させるのだが、両氏ともに、たんに知識というのではない、国文学の素養が身についている点、文学開眼が何より直接の感覚的な陶醉としてあたえられた点などのいちじるしい共通性が直ちに目につく。というのも、幼少年期における感受性形成の過程に、相通じるものが多かったせいではあるまいか。

そこで、二十六歳の舟橋氏が、ちょうどその誕生日に、二冊目の作品集を出版するという幸いな偶然のめぐり合せにぶつかった時に、みずからの守護女神に対して、甘えとも見えるような感謝の辞を捧げたのは、当然であろう。すなわち、一九三〇年十二月二十五日に発行された氏の「パンガロオの秘密」には、次のような序文がつけられている。『一九〇四年十二月二十五日が僕の誕生の日であった。僕の愛するグラッド・ママはその日が、基督降誕の祭典なので、僕に聖な名前をつけてくれた。僕の第二の創作集「パンガロオの秘密」は、僕の二十六回の、この誕生日に発行することになった。……』そして、「一九三〇・Xママスの夜」と日付が入っている。青年作家にとって、最も心はずむ出来事である新しい著書の刊行に当たって、まず彼の心に浮かんできたのが、祖母への——守護女神であり名付親でもあった「グラッド・ママ」への甘やかな感謝である点にご注目願いたい。

氏の祖母との親しい絆が、青年時代に至るまで変わることなく続いていった証拠に、高等学生になって後も祖母の旅

行に同行していることでも判る。《私がまだ高等学校の学生だったころ、祖母につれられて、洗温泉に湯治したことがあったが、そのとき、祖母の旅行の目的は、高山植物の採取にあった。その後、祖母は自分の邸内にロックガーデンを築き、それに諸山の高山植物を植えて楽しんだものだ。この祖母は、ずい分、道楽の多い人だった。》（『風流抄』）高校時代といえ、水戸高校生としての氏は、清元の稽古に凝り、そこで知り合った芸者と遊び出して、おきまりの金詰まりにおちいった時も、結局頼みの綱は、この祖母ということになった。《祖母は、私をして芸者に近づけしめた張本人である。……また芝居へつれて行ったのも祖母であり、贅沢や軟文学をおぼえる素地をつくったのは、すべて祖母の溺愛によったのであるから、M高時代の私の遊蕩の跡始末をしてもらう者としては、祖母を描いて他にないと思ひこんだ。』といった虫のいい一人含点がまた、大したお小言も食わずに実行してもらえたのである。

さて書きおくれたが、舟橋氏の生まれたのは、本所区横網町二の二番地である。本郷の大学に通う助教援が、新居を定めるに当たって、わざわざ大学から遠く離れた本所を選んだというのも、じつは母方の実家の牽引力、あるいは財力が働いたらしい。《父夫婦の家は、結婚当時は、本所の横網町で、そのころ、全盛をうたわれた横綱太刀山のいた友綱部屋の筋向いで、家の庭先が、大川から流れこむ堀河に臨んでいた。そこへ、若い取的の土左衛門が上がつたりしたこともある。……どうしてそこに新居をトシたかと

云えば、母の実家が、そこから近い番場町の多田薬師のすぐ傍にあったからである。そこは敷地が六百坪。建坪が二百数十坪の、贅沢な住宅で、それにくらべると、横網の家は猫のひたいほどなかった。『(風中燭) 祖母の家と父の家との対比は、氏の幼児の思い出にはくり返し響きつづける、執拗な基調低音である。氏の「相撲記」から、このあたりの描写を引用すると「昔、私の母の家は、両国橋を渡って、すぐ左側の、藤代町というところにあった。母の通った江東小学校が、ちょうど今の、国技館の建っている所で、当時は小屋掛けの相撲場がこの江東小学校に隣接していた。……明治四十二年に、待望の国技館が建ったところには、母は結婚していた。私が生まれ、すでに六歳であった。藤代町からすこし離れた横網町に、新居を持った。

「三人吉三」でお馴染のお竹蔵と、堀割一つへだてた所である。藤代町から、百本杭を通して、向う岸の代地の色街に通う富士見の渡しを左に、おくら橋を渡ると、右に石原へ抜ける道があって、そこを入ると、三四軒おいて、友綱部屋があり、私の家はちょうどその筋向いに当たっていたのである。裏の堀割は、大川の水が、百本杭の手前で、左へ折れ、おくら橋の下を潜って、お竹蔵の前へ鈍く激むように入りこんでいた。堀割の突当りには、蘆が生え、昔本所七不思議の狸がポコポコと腹鼓を打った音が時々その蘆の中からも聞こえたのだと、私は聞かされた。』

この友綱部屋は、氏の家と「幅二間ほどの往来を隔てた向い合い」で、取柄がしじゅう遊びに來た。その中に「寒玉

子というユーモラスなシコ名」の力士がいて、よく聖一少年をおぶって、本所から浅草界限をつれ廻ってくれた、という。この寒玉子の思い出は、氏の初期の短篇「力士と少年」(昭和五年)にも、そのまま生かされている。三十代末の氏に、「相撲記」一卷を書かせたものも、こうした幼時の、頼もしい力士の背中の中の厚みと温かい感触の思い出であり、いわば幼年時代回帰の喜びが、この記録的な本全体に、温かい肉感性、官能性をあたえている。これはたんに比喩ではないので、今の「寒玉子」の挿話も、彼の情人の芸者に、いきなり

膝の上に抱き上げられて恥かしくてならなかったという感覚的な思い出でしめくくられている。氏の名作「川音」は、久しぶりに山の手から出てきた女主人公が、「大川のほとり」とろんした青い魚の背中のような川波」に、少女時代を思い出すという設定だが、この



舟橋家三代の食事風景 左より父了助、弟和郎、聖一、手前左より長女美香子、母さわ子、妻百寿



昭和5年ごろ

短篇に鮮かな生命力をあたえているのも、大川端と相撲にからむ幼時の思い出への愛着と、官能的な目ざめとの結びつきに他ならない。一銭蒸気で大きな橋梁の下を通る時の、「夕立のような川音」がして、「光線がスウッと翳って来て穴の中へ引っぱりこまれるような」感じは、「力のある胸幅のひろい男の人」にそばに寄られた時とそっくりといった箇所の見事な効果は、忘れがたい。

II

ここで、ふたたび、みたび、舟橋氏と荷風との類縁に立ちもどることができる。荷風の幼年時代における重要な文学的要因として、「下谷の家」と「小石川の家」と、父と祖母との対照をあげたが、この事情は、ほぼそのまま舟橋氏の場合に当てはまる。舟橋氏の住居は、やがて本郷へ、また下落合（当時は、府下豊多摩郡下落合村）へと引っ越したが、その間祖父父母の家も目黒に移って、二つの家の劇的な対照は、そのままの形で持ちこされてゆく。しかも、聖一

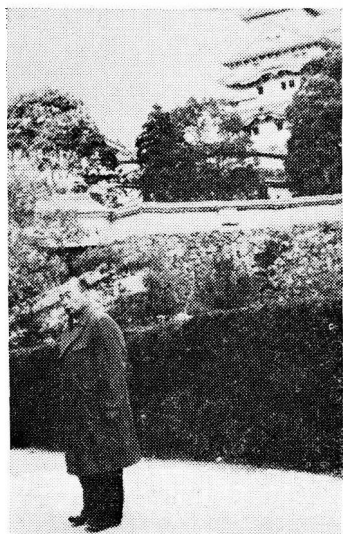
少年、五歳の折に、父の三年間に及ぶ外遊という事態が生じて、父の留守中は、神奈川県腰越の祖父陸三郎氏の別荘で暮らし、小学校も土地の学校へ入った。これは、根からの都会児、大川端育ちの聖一少年にとっては、恐ろしく肌合いの違う環境だったに違いない。腰越は漁村であり、土地の子供ばかりの小学校で、「別荘の坊ちゃん」は、何かにつけて異質的で、仲間外れにされることが多かった。そこで、一年間の大半は、学校を欠席してしまうのだが、これには、聖一少年のアレルギー性体質の脆弱さ（ぜいじやくさ）という他に、父の留守中の甘え、わがままに大きく一役買っていたに違いない。息子肉体的な弱さ、神経的な敏感さに対する、強健な父親の抑えがたい反撥、叱責といった事情は、たとえば荷風の短篇「狐」において鮮かに作品化されているが、舟橋氏もまた「真贋の記」の中で、「ビードロ徳利」という渾名をつけられた話を取り上げている。しかも、この渾名をつけたのは他ならぬ父親で、少年は誰よりも父によって、また父に対して、自らの弱さを自覚させられる、という点に注目せざるを得ない。

『慶吉は自分が弱いのを、たえず父に責められているような気がした。しかし、弱いものは、なかなか強くはなれない。寒いとすぐ感冒をひく。強い風が吹くと、すぐ熱が出る。それも一ト月一度、または二度ぐらいの割だから、父が、「またか」と、いやな顔をするのも、無理ではない。『慶吉のようなのを、ビードロ徳利と云うのだ』そんな渾名をつけられた。』

この弱さの自覚は、当然、強者、また硬派的なものの、軍人や武術にかかわるものへの反撥と恐れを生み出す。まず、強者の代表としての「父」、圧倒的な力の源としての「父」という象徴的なイメージが、定着することとなり、これと一連のものとして、軍事的、強権的、暴力的なものへの反撥と恐れが、生まれてくる。今の引用のすぐ後に、「だんだん上級生になるに従って、……そのころの理想的人間像だった大山元帥だの東郷大将だの乃木さんなどの名前を聞くのもつらかった。」とつけ加えられている。こうした軍人嫌い、軍事への反撥は、やがて太平洋戦争下の舟橋氏をして、谷崎潤一郎の「細雪」と比肩し得る、戦時下の反軍事的な名作「悉皆屋康吉」(昭和二十年)、この繊細さと緊張とをかね具えた美的職人の物語の完成に没頭させることにもなった。

また、「父」的なものについては、同じ「真贋の記」に《教育者だった慶吉の父は、子弟に対しても、厳格な硬派の方針であったから、病気がちの慶吉はひたすら父を怖れた。それが先入主になって、父の死ぬ数年前まで、正直な話父にはどうしても、なじめなかった。しかし、下町からこの土地(下落合)へ居を移したのも、T校へ子供を通学させたのも、みな父の判断であって、家人はこれに服しただけだ。母でさえ、父の考えにさからうことは許されなかった。》とある。一体この「真贋の記」は小説であって、この中の記述を一切事実そのままと受けとめることは、素朴すぎ、軽率すぎる読み方であろう。題名の示す通り、これ

は六十代に達した舟橋氏における、ゲーテのいわゆる「詩と真実」の書に他ならない。ぼくがここで抜きたいのも、個々の伝記的事実そのものの「真贋」ではなく、作家としての舟橋氏における「詩」的真実の方である。個々の事実の穿鑿(せんさく)よりも、イメージとしての事実であり、その文学的な意味をこそ考えたい。つまり、作家としての舟橋氏が、ある事実や経験をどういう観点からとらえ、どういう形で、またどういう方向を目ざしてイメージ化しているかという問題である。一般的に言って、作家の伝記は、そちらの方に重点をおくべきものだし、ことに生存中の現代作家を対象とする場合は、なおさらそうあるべきではなからうか。舟橋氏における「父」に対する恐れと反撥とを強調するのも、この意味においてなのだ。「父」への反撥が、「祖母」への愛着という対極をよびこみ、「祖母」的なものが、



姫路・白鷺城にて 昭和36年

次第に反父的なものの集約、象徴の観を呈してくる。弱い者、都会的なもの、生活上の贅沢、趣味の豊かさ、芝居や文学好き、享楽性などのすべてが、氏の場合、何らかの意味で「祖母」の存在と結びつけられている。舟橋氏の現実の祖母が、果してそれほど深く、広い影響力をふるい得たかという疑問は別として、氏自身がそういう反父的、「祖母」中心のイメージでとらえ、そう思い描くことを一貫して固執して来た、という点は動かせないのである。

今の引用に見られるように、幼年時代における住居の移転も、もっぱらこの観点からとらえられている。下町から山の手へ、さらには郊外の田舎へという移転は、もっぱら「父の判断」によるものであり、「家人はこれに服しただけだ」と、舟橋氏は書いている。「父」の意志と強制力という含意は、あらわすぎるほど明瞭だ。あるいは、実際にも、こうした移転には、若い父親の側における、母の実家の勢力圏からの脱出という暗黙の衝動が働いていたのかも知れない。通勤上の便宜という実際的な要素より以上に、さまざまな形で及んでくる妻の実家の側からの心理的物質的な圧力への反撥、そこからの離脱という気持が働いていなかったとはいえない。その上、舟橋氏の父の了助氏は、仙台出身のいわば東北人の「田舎者」であり、これまた普通並以上に、都会的、下町的、享乐的な、妻の実家の雰囲気嫌悪を抑えがたかったということも、十分考えられる。アメリカの小説家、ヘミングウェイの場合にも、相似た事情が見出されるので、豊かな妻のシカゴの実家に住んで、こ

こで開業せざるを得なかった貧しい質実剛健型の父親は、ヘミングウェイが生まれて間もなく、北ミシガンの辺鄙な田舎に質素な別荘を建てて、休暇には必ず妻子を引きつれて、長期の滞在に出かけていた。アメリカ人らしい、生な手つかずの自然への憧れというばかりではなく、妻方の勢力圏からの離脱、息抜きという一面も見逃せないとはくは思うのだし、若い父親として、息子を自分流に育て、躾けたい、という気持も一役買ったに違いない。

舟橋氏の父における、下町から郊外の田舎へという移転の決意にも、同じような動機は働いていなかっただろうか。「真贋の記」の「序詞」につづく冒頭章は、「麦の浪の章」と題されていて、当時の下落合が、ほぼ完全に農村の状態にあったことが語られている。《慶吉の家の門を出て、少し行くと、一面の広い麦畠があって、青い穂波が、四月末のそよ風にそよいでいたと云っても、今では嘘のように聞こえる……。……彼が小さいランドセルを背負って、小学校へ通うとき、麦の穂のすくすく伸びたのが、子供の背丈より高く、帽子もランドセルも、みな青い浪の中へ沈んでしまったものである。》舟橋了助氏に、移転先として、こうした非都会的な場所を選ばせたのは、たんに大学教授としての収入のみではなかったように思われる。だが、その点よりもっと重要なのは、ここにおける自然のとらえ方である。この点については、すでに伊藤整氏による鋭敏な指摘（中央公論社版「日本の文学」第54巻解説）があるので、《この描写自体、本当の郊外の風景であるよりは芝居